



協同という生き方

(社) 北海道地域農業研究所 所長

太田原 高昭

日本の社会は壊れ始めているのではないだろうか。親が子を殺し、子が親を殺す。学校ではいじめられた子供が自ら命を断つ。

望を持てなくなった社会は確実に壊れて行くだろう。

会社ではリストラ目標を達成するために社員を地下室に閉じ込めて退職に追いやる。勝ち組、負け組などという亡国のことばが流布し、セレブとワーキングプアが対照を描く。

こんな世の中にだれがしたのか、原因を追及していくと「市場原理」「競争原理」という文字が浮かび上がり、得々とそれを説く政治家や学者の顔がみえてくる。かつてはヒューマニズムとい

ういいことばがあつたが、この人達はみごとにそれを断ち切つて、大が小を駆逐するのは当たり前、敗者は市場から退場すべしと言明して恥じない。人間は競争で追い立てないとただの怠け者にすぎないという薄っぺらな人間観がそれを支えている。

御免蒙りたくなる。年寄りが早く死ねば、年金も健康保険も助かるのかもしれないが、肝心の若者が世をはかなんで閉じこもり、二トに逃げる。もちろん年金も健康保険も払わない。若者が希

なもので、それをそのまま貫徹させていたら人間社会がもたない

ということとは、ずっと昔から知られてきたことである。それは冬になれば寒くなるというのと同じで、人間は防寒の知恵を働かせて冬を克服してきたように、剥き出しの市場原理に対しても様々な社会制度をつくって人間社会を守ってきた。それを一枚づつはぎ取っていこうとするのは人間発達に逆らう暴挙である。

「協同」もそうした知恵のひとつであり、他人へのおもいやりと助け合いという人間本来の性質に依存して経済法則をコントロールしようとするものである。言い換えればそれはヒューマニズムの所産であり、単なる制度ではなく、人間の生き方そのものである。それを非効率とか低生産性と結び付けて排除しようとする者たちは、ヒューマニズムを拒否することによって日本人を墮落させ、自らの人格をも破滅させていくことになるだろう。

いま農村現場には冬の烈風が吹き荒れているが、しつかりした雪囲いと暖かいストーブと共に、堅固な協同の思想でもってこの冬を克服していこう。わが国の農業と農協を弱者排除のターゲットにしている市場主義者たちは、同じ精神と論理でわが国の福祉、教育、医療、そして小規模経済のすべてを破壊しようとするだろ

う。農協に結集し、農業と農村を守ることは、人間が人間らしく暮らせるこの国の社会を守ることである。

新しい年を迎えて、壊れつつあるこの国の社会に暗澹とするだけでなく、農業者が長い歴史の中で育んできた協同という生き方に希望を見いだしたいと切に思うのである。

